The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞山本直子著『「多文化共生」言説を問い直す：日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』（明石書店・2024年）
Author(s)	拝野, 寿美子
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 73-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

山本直子著『「多文化共生」言説を問い直す：日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』（明石書店・2024 年）

拝野 寿美子

本書は、著者が 2019 年に慶応義塾大学大学院社会学研究科に提出した博士論文をもとにデータを更新して書き上げられたものである。

研究の目的は「日本社会で外国人の社会統合を考えるうえで多用されてきた『多文化共生』をめぐる言説について、日系ブラジル人第二世代へのフィールド調査から再検討を加えること」である（p.3）。そこには、調査地の自治体職員としての著者の経験に基づく、多文化共生という社会的な目標達成に向けた施策としての「外国人住民への支援」に対する問題意識がある。調査対象として在日日系ブラジル人第二世代を選んだ理由については、「『日本人』と『ニューカマー外国人』というような二項対立的な視点を内包した多文化共生の限界と、人々の間に引かれる文化本質主義的な境界線の問い直しを社会に突きつける存在となりうる」ためと説明している（p.16）。

本書で議論されている愛知県豊田市のブラジル人集住地 A 地区をめぐる様々なレベルで見受けられる「多文化共生」の捉え方や施策には、日本人が持つ自明の優越感、パターナリズム、同化主義という視点が含まれている（p.227）。日本人住民が望む形での多文化共生はしばしば同化主義的であり、温情主義的であり、「支援する側、される側」という権力関係が立ち現れるマジョリティに管理されたものである。著者はそれを「何が『多文化共生』的であり、何がそうでないのか、という判断が日本人側にゆだねられているという状況の中では、居住地のエスニック・コミュニティは禁止や監視の対象ともなってしまう」（p.159）と警鐘を鳴らす。また、第二世代に対する「多文化共生施策における支援制度は、日本語という面に関しては一見、支援が手厚いようにみえる一方で、外国につながる子どもたちが抱える多様な問題を、『日本語教育によって解決できる』とし、それ以外の問題は、自己責任の範疇であり、自助努力で解決すべき事柄であるという論理を内包」していると鋭く指摘する（p.134）。

上記の課題を抱えている「多文化共生」の視点や施策に、A 地区

に住む日系ブラジル人第二世代はどのように巻き込まれ、傷つき、抗い、利用し、生き延びているのか。本書はアレハンドロ・ポルテスおよびルベン・ルンバウトがアメリカの移民第二世代のホスト社会への編入の仕方として導き出した「分節同化理論」を分析枠組みとしながら（p.33）、19 名の第二世代の若者、政治家、教育支援者などを含む 7 年間にわたって収集された 57 名のインタビューデータに基づき、以下の 7 つの章で構成されている。

研究の背景や目的、先行研究の検討、分析枠組みおよび調査方法が提示された序章に続く第 1 章「政府文書にみる多文化共生概念の展開」では、日本の外国人をめぐる状況を大きく変化させ、またその後の外国人政策の方向性を決定づけることとなった、1990 年施行の改定「出入国管理及び難民認定法」（入管法）による社会の変化についての説明に加え、在日日系ブラジル人第二世代の日本での生活に影響を与えてきたと考えられる政府文書の内容の検討を通し、政府の多文化共生に対する姿勢の変遷が明らかにされる。

第２章「地域社会に浸透する多文化共生言説」では、愛知県豊田市を事例として、市議会議員や行政職員、地域住民の発言などから地域における多文化共生に関する言説が考察され、パターナリズム、同化主義、日本語支援偏重主義が地方行政において影響力を持ってきた点が指摘される。

第 3 章「支援の功罪」では、国や行政によって進められる多文化共生施策が第二世代に対してどのような影響を及ぼしてきたのかが明らかとなる。具体的には、第二世代の最も身近な社会である公立学校で多文化共生施策として実施されている日本語支援が彼／彼女らに果たす機能について、公立学校教員、日本語指導員、第二世代当事者の若者へのインタビューをもとに考察され、制度の不足や多文化共生施策に内在するパターナリズム、同化主義、日本語支援偏重主義がもたらす弊害が指摘される。

第 4 章「コミュニティとネットワーク」では、ポルテスらの「分節同化理論」において第二世代の社会統合に大きく貢献するエスニック・コミュニティが対象地域においてどのような役割を担っているのか明らかにされる。具体的にはＡ地区内で定期的に開かれる様々なイベント、プロテスタント教会やブラジル人同士の集まり、インターネットを介したトランスナショナルなコミュニケーションについて検討が加えられる。

第 5 章「『グローバル人材』言説が与える新たな立ち位置」では、大学や大学院への進学を果たす在日日系ブラジル人第二世代に着目する。はじめに、英語力を伸ばすことで自己肯定感を高めることができた複数の事例が提示される。次に、「日系ブラジル人」であるというハイブリディティと、地域の国際化やグローバル人材育成の流れの中で重要視されるようになった英語教育との関連性に着目し、それらを政府のグローバル人材育成施策として設定されたスーパーグローバル大学の入試に戦術的に利用することで進学を果たし、社会上昇の機会を得た第二世代の様子が描かれる。

終章では、本書の学術的貢献と課題が説明される。貢献とされるのは、これまでは移民第二世代の社会適応や教育達成が困難である一因として第一世代の労働市場における立場や社会経済的な脆弱性が挙げられてきたが、本書でそれに加えて国や地域社会の多文化共生実現のための施策や人々の態度が、第二世代を取り囲む地域社会・学校・支援現場の姿勢に影響し彼／彼女らの社会編入を阻む要因にもなっていることが立証された点である。一方で、外国人散在地域における調査の必要性や調査協力者の属性の偏りが研究の課題として提示されている。

複数の視点から入念に調査・考察されている本書で評者が自戒を込めて伝えておきたいのは、「日系人」という定義の揺れである。本研究における「日系ブラジル人」は日本での定住を可能としている日本人移民の子である日系 2 世や孫の 3 世だけでなく、彼らの非日系人の配偶者も含む。つまり日本で合法的に就労・居住できる「在日ブラジル人」全体を指している（pp.21-22）。この記述により、本書における「日系人」はいったん血統的な限定を外される。その上で、「日系人」は多文化共生が前提としてきた「ニューカマー外国人」でありながら、1990 年施行の改正入管法で公的に日本とのつながりを認められた存在でもあるという「日本人性」と「外国人性」を同時に強調する、可視化されたハイブリッドな存在であり、「在日日系ブラジル人第二世代は、多文化共生が前提とし対象としてきたものを根本的に揺るがす存在となり得る」（p.31）と表現される。ここで「日系人」の日本人との血統的なつながりが呼び戻される。「日系人」は本書において「多文化共生」に次ぐ重要なキーワードであるにもかかわらず、文中では「日系人」、「在日ブラジル人」、「日系ブラジル人」、「ブラジル人」という用語が互換的に使用されている。そし

て最後には、「彼／彼女らは二項対立を崩すような存在になっているとは言い難い」と結論付けられる (p.229)。この結論には納得がいく。在日日系人こそが多文化共生施策開始のきっかけとなった「ニューカマー」の中心的な存在だからである。著者は「ニューカマー」を「ニューカマー外国人」と括り直して「ニューカマー」から「日系人」を外し、概念上その「日系人」を「日本人」と「ニューカマー外国人」の中間に位置付け直したが、現実には中間には位置づいておらず「日系人」は引き続き「ニューカマー」に留まっているということであろう。

著者が考える「日系人」の特性は、多文化共生をめぐる「日本人」対「ニューカマー外国人」という二項対立の現状を揺るがすほどの決定力を持ってはいなかった。「日本人でもなく外国人でもない、そして、日本人でありつつ外国人でもある」(p.234)という著者が考える日系人の中間性やハイブリディティを、政治家も地域住民も教育支援者も、そして研究対象の第二世代当事者さえも重視していなかった。日本人対外国人、日本文化対外国文化という二項対立的な視点を前提とした共生論に代わり、マイノリティにもマジョリティにも内在する多様性を自覚する方向に多文化共生の理想を設定する著者は、この多様性を体現する存在として二項対立を崩す契機となる可能性を日系ブラジル人第二世代に見出したのだが、当事者の発言にあるのは「日本生まれ」「日本育ち」であることや、自分が「ポルトガル語話者」で「ブラジル人」であるという「在日ブラジル人」（つまり在日外国人）を説明するものである。著者が先行研究で引用しているような、かつてブラジルに渡った日本移民の子孫であるといった血統的・社会文化的な中間性やハイブリディティを示す内容ではない。「日系人」を対象としたこれまでの研究の焦点は、「日本人」との血統的・社会文化的つながりである。つながっているが、そのものではないという意味での「ハイブリディティ」や「中間性」は理解しやすい。「日系人とは」という問いが立てられ、そこに真正面から挑むアイデンティティ研究や言語文化研究などでこうした中間性やハイブリディティそのものが考察対象となる場合、当事者は「あなたは日系人である」との他者からの眼差しに対して迷ったり、同意したり、否定したりする余地がある。ただ、本書の調査対象である「在日日系ブラジル人第二世代」による、いわゆる日本人移民の子孫であり家庭生活においても日本語や日本文化に多少なりとも

親和性がある、その上で、ブラジル文化も身に付けたりポルトガル語も理解できるといった「日本人でもあり外国人でもある」というハイブリディティが見受けられる発言は、本書では見受けられない。反対に、ポルトガル語を母語に持つことで日本人よりも優位に立てる英語の習熟を進路選択で戦略的に活用したり、日本人を相手に「英語話者」となって、つまり、日本語しか話さない日本人でもポルトガル語を話すブラジル人でもないことを装いながら「ガイジンごっこ」でその場を楽しんでいたりする姿からは、彼／彼女らが自身と「日本人」の間に（もしかするとブラジル人との間にも）境界線を引いて「ニューカマー外国人」カテゴリーへの帰属を進んで選択しているようにも見える。そのような選択も含めて「マイノリティの多様性」なのであろうか。「日系人」を対象に研究する者は、「日本人」と「ブラジル人」（あるいは「外国人」）の血統的・社会文化的な中間性に着目しがちであるが、研究者がそこに見出すエスニックな希少性が当事者にはそれほど強く意識されていない可能性があることにも、改めて留意が必要であると再認識した。

日系人研究の難しさを述べはしたが、7 年という歳月をかけて、行政職、研究者、一住民という異なる立場から蓄積し培った人間関係やインフォーマントとの信頼関係から得られたデータが貴重であることに変わりはない。そして、そこから導き出された多文化共生施策の功罪、その一環としての日本語支援への偏重や支援の現場ではびこる権力関係といったホスト社会が直視すべき課題群、そうした不利な状況においても第二世代を社会統合へと導くエスニック・コミュニティの貢献、第二世代の若者たち自身の努力や機転など、本研究の根幹となる研究成果の妥当性について疑う余地はない。分析軸についても新規性が見受けられる。本書で考察されている SNS を介したブラジルの親戚やブラジルの最新事情への頻繁なアクセスによるトランスナショナルなネットワーク形成である。着実にこの視点を研究に取り入れて第二世代の今を描き出した本書の功績は大きい。これからの若者研究で不可欠な視点であることが改めて浮き彫りとなった。

本書は著者が行政職員時代に抱いた疑問に始まり、その後結婚を機に東京に移り住んだ後に幼い子どもを抱えながら調査のために再び豊田市に住み込むほど、ぶれない、魂のこもった得難いデータに基づく研究成果である。女性であったり子連れであったりするマイ

ノリティ性に歯噛みをしながらも、それを逆手にとって調査を進めていく旺盛な研究意欲、高い問題意識に改めて敬意を表する。